

ロ ッガロ ッホノ石フミ 夷ガ栖ナル千嶋」（諸本で異同がある）は、この周
辺の筈である。しかし、ここ一箇所しか出て来ない。

（注四）（注五） 富倉徳次郎著。昭和四一年五月。

（注六） 早川厚一・佐伯真一・生形貴重「四部合戦状本平家物語評釈（五）」（昭和六〇
年一二月）の「医師問答」の「考察」で早川氏が細かく四項に分けて居られるが、
筆者は大まかに纏めてみた。

（注七） 注六の「考察」における生形氏の表現。

（注八） 注六五の「考察」における佐伯氏の表現。

本稿は去る六月十九日、本学で行われた生涯学習県民大学成人講座の同題の内容を、
資料等で補訂しながら文章化したものである。

（一九九三年十月四日受理）

朝ノ醫道」の「陵遲」となることを論じている（漢の高祖の逸話以下は延慶本・源平盛衰記と表現まで極めて近い）。従って、当道系諸本の重盛は、「國ノ恥」を顧慮して診療を拒否したという印象が強い。この点で、当道系諸本の重盛は、何のこだわりも感じさせない清盛と対照的である。

当道系諸本では「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」と「小松殿熊野詣事」で、重盛の態度がかなり異なるのではないかという印象がある。前者では日本の国柄への絶望感が示され、後者では「國ノ恥」に対する強い潔癖感が打ち出されている。前者では、宋は日本に代わる国としてあるが、後者では厳しい壁が隔てている。しかし、この二つの態度は重盛の「賢臣」^(注七)としての像の中で統一を保っているように見える。一門の滅亡後に備えたかのように宋の阿育王山に寄進し、死の床にあっても「平安貴族の常識的理念」^(注八)を固く守った。これは普通の人には絶対に出来ないことに違いない。父清盛の進めた国際化の時代に重盛はこのように対応した。

六

最後に当道座を確立した覚一と同時代を生き、「平家物語」を享受していたと考えられる兼好法師の『つれく種』（正徹本）から「から物」についての意見を引いて考察し、この稿を終えることにしたい。から物はくすりのほかはみななくともことかくまし 文ともは此國におほくひろまりぬれはかきもうつしてん もろこし舟のたやすからぬみちにふようの物とものみとりつみてところせくわたしもてくるいとおろかなり 遠ものをたからとせすとも又えかたきたからをたうとますとも文に侍とかや

「もろこし舟のたやすからぬ道」とあるが、第二節の日本から外国

に出る例で、「鬼海」や朝鮮半島の国が挙げられず、只「天竺振旦」だけを挙げているのは「平家福原」^七「一夜宿事」の章段における源平盛衰記の例だけである。これに対して、「天竺振旦」を挙げず、「鬼海」や朝鮮半島の国だけとなっているのは「平家福原」^七「一夜宿事」における延慶本・長門本・四部合戦状本・両足院本、「尾形三郎平家」^九國中ヲ追出事」における源平闘諍録・南都本・小野文庫本以外の諸本、「宗盛院宣ノ請文申ス事」における非当道系諸本、「判官為平家追討西國へ下事」における長門本・源平盛衰記・両足院本である。特に長門本は一度も「天竺振旦」を挙げていない。長門本の場合は、編著作業が行われた土地も影響しているかという気がするが、右の差は軍団が船で移動する時の難易度に因るのではなからうか。「平家物語」の時代、「もろこし」が「たやすからぬ」船路であったのは明らかである。「遠ものをたからとせす」「えかたきたからをたうとます」というのは「八人ノ娘達之事」に描かれていた平家の栄華への批判としても使える。兼好は清盛に対しては批判的だったと言えるだろう。同時に、「くすりのほかは」と例外を設けた兼好は、「小松殿熊野詣事」で当道系諸本が語り出す重盛の態度には啞然としながら、心の中で感嘆したに違いない。

このように見れば、国際交流についての感覚で、兼好は「平家物語」の作者に一致するところが多く、「平家物語」の好き享受者だったかと思われる。

（注一） 森克己「日宋・日元貿易の展開」（体系日本史叢書5）『対外関係史』（昭和四五年二月）の第三節「日本商船の海外進出」など。

（注二） 「平家物語」からの引用で特に断っていないものは延慶本の表現である。又、当道系諸本の引用で特に断っていないものは屋代本のものである。

（注三） 但し、関わりを示す表現はないが、「水臣殿父子関東へ下給事」にある「アク

ている漢の高祖の例を挙げる。高祖が「維南ノ懸布」を攻撃した時、流矢が当たった。后が良医を呼んで診断させたところ、療治出来るが、「五百斤ノ金」が欲しいと答えた（当道系諸本は「五十斤」とする。

一方、源平盛衰記は、高祖の逸話に入る前に、「命は天のあたふる事」ではないかと述べ、保元・平治の合戦の時は「命を捨て」合戦に臨んだけれども命を保ったと言っている。又、四部合戦状本では保元・平治の例だけ述べて、高祖の逸話は他人の「喩」となっている。高祖は、項羽と合戦を繰り返したが、一度も疵を受けなかった。「今天命地ニ墮テ既ニ疵ヲ被レリ」（源平盛衰記は「天の命に背くに依て」とする。一方、当道系諸本では項羽との戦いといった具体的な戦いを示さず、「多ノ疵ヲ蒙リシカトモ其ノ痛ナシ」とし、「運既ニ尽ヌ」と言う。名医も疵を癒すことは出来ても、命を癒すことは出来まいから、無益だ（源平盛衰記や当道系諸本はそれぞれに表現を異にするが、「命ハ則在天」のだから、只治療を加えても無益だといった趣旨になっている）。自分は「金」を惜しむのではないと言って、要求された量の「金」は与えながら、治療を受けないで死んだ。

次いで、これは延慶本だけにあるものだが、三条天皇の時代、「唐朝」の後が「悪瘡ヲ煩」っていた時、異国にまで名医の評判が轟いていた典藥頭雅忠が招聘された。しかし、公卿僉議の席で帥民部卿経信が、「醫療ニ無効驗者本朝之恥辱也」「有得驗者大國ノ醫道此時ニ永ク可絶」^ヌ「他國ノ后死^ム 事本朝ノ為^メ 何ノ苦ミカ有ヘキ」と言って反対したので、「渡唐」出来ないことになった。その旨を江中納言匡房が「牒詩」に書いて送り、「両朝ノ感歎」を得た。これに対し、允恭天皇が「久ク篤疵ヲナヤミ給」うた時、「新羅國」の医師を迎えて完治された。この例があつたので、忠雅を強く求められたのであつたが、允恭天皇の例は「本朝第一ノ不覺 異朝無並ノ嘲哂」であつた。

右の例を挙げた後、重盛は次のように言う。自分は今大臣の位にい

る。その運命は「天心」にある。「天心」を療せずして「醫療」を加えても無益である。このことは「彼耆婆力醫術及ハスシテ釋尊涅槃ヲ唱給」うたことに明らかである。件の「名醫」も耆婆には及ばないだろうし、どんなに医術書に通じていても「有待ノ依身」「先世ノ業病」を治すことは出来ない（以上は四部合戦状本にはない）。「彼ノ治術ニ依テ存命セハ本朝ノ醫道ナキニ似タリ 若又効驗ナクハ面謁ニ所詮ナルカヘシ」（四部合戦状本は、この文の前に「見^ヘ我朝伊師其不叶^ハ候^ハ時^ヲ 見^ヘ異国者^モ 候^メ」という一文があり、「若又」以下は次の文章と混交している）。大臣の位にある者が「病床ニ臥ナカラ異朝浮遊ノ来客ニマミエ」るのは「國ノ恥辱」であり、「道ノ陵遲」である。命は亡ぶとも「國ノ恥」を無視することは出来ない（この一文は四部合戦状本にはない）。以上が重盛の返事である。当道系諸本はこの後に、盛俊から重盛の返事を聞いた清盛が非常に驚いて、「日本ニ相應セサル大臣ニテ今度一定失セナムス」と言って泣いたことを付け加えている。

延慶本・源平盛衰記・四部合戦状本における重盛の返事は、第一に自分の運命は「天心」にあること、第二に異国の「治術」で助かれれば「本朝ノ醫道」の「陵遲」となるし、大臣が病床に臥したままで異国の人に会うのも「國ノ恥辱」であること、の二点である。^{（注六）}四部合戦状本が右のことを最も簡明に述べて居り、延慶本が最も多くの例話を交じえて話している。同時に、この三本とも重盛は自らの口で「存旨」がある為に「醫療」を加えないことを述べている。ところが、当道系諸本の場合は、そこが「重盛苟クモ烈九卿烈三台 何ソ天心ヲ不察シテ醫療ヲ徒ニイタハシクセン」とかなり一般化されている。又、当道系諸本の重盛の返事は、冒頭と末尾に身分のある者が外国人を近付けることを「國ノ恥」とする考えを配している。そして、それに挿まれる形で、「天心」が第一であることと異国の「治術」で助かれれば「本

ある)に送ったという(延慶本には「送文」が記されている)。「金」の内、実際に送られた分は二千両が「大王」に(源平盛衰記・四部合戦状本は千両を、当道系諸本は二千両を「御門」「帝」にとする)、二百両が、「伊王山ノ僧徒」に(四部合戦状本は百両、当道系諸本は千両とする)であった(残金は船頭「妙典」の分)。「大王」「伊王山」に「供田」(延慶本は実際に寄せられた「供田」に触れない。延慶本以外の諸本は五百町の広さとする)を寄せ、過去帳に書き入れ(当道系諸本にはない)で、「大日本國武州天守平重盛神座」(当道系諸本は「日本大臣平朝臣重盛公ノ後生善所」という表現である)と毎日、現在まで読み上げられていると言う。重盛が「大唐」に前記のようなものを送ったのは、「吾朝ニ思出アル程ノ堂塔ヲモ立テ大善ヲ修シ置ハヤ」と思っていたが、「一門ノ榮耀盡テ當家滅ナム後ハ忽ニ山野ノ塵トナラム」と考えたことによる(四部合戦状本や当道系諸本は「我朝ニハ如何ナル善根シタリト云共子孫ニ相續テ訪ハレム事難有」といった表現である。一方、源平盛衰記は「我朝の三宝に財宝を抛て給ふのみに非ず異國の仏陀にも志をそはこひける」とする。猶、これと同じ表現が延慶本にもある)。それで、「他界ノ後マテモ退轉」ないように「大國ニテ」善ヲモ修置」こうと図ったのである(源平盛衰記以外の諸本には同趣旨の文がある)。このことは、筑前守貞能に相談して、貞能に処置を命じたのであった(延慶本以外にはない)が、丁度その時上京した「妙典」という博多の船頭を呼び寄せ(四部合戦状本は博多から、源平盛衰記や当道系本の中院本・両足院本・八坂本は筑紫から、前記三本を除く当道系諸本は、「鎮西」から呼び寄せたとする)。又、源平盛衰記だけは「妙典」を「唐人」とする)で、前記のことを託したのであった。又、源平盛衰記は、「金」と一緒に「小堂を建立」するための「檜木材木一艘こき渡」したと伝える。「大唐」の「帝」はその檜で「寶形作の御堂」を立てて阿育王山に寄せたという。

延慶本の場合、治承二年の春という時期は、重盛の死ぬ一年一季節前である。この時点で「入道ノ榮花一期ノ程トミヘタリ」と言っているのは、彼が平家の滅亡を予知した他のどの逸話よりも早いことになる。両足院本を除く当道系諸本の安元というのは、治承の前の年号であり、屋代本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・中院本・大山寺本・八坂本のように「未来ノ事ヲモ兼テ知給」いてのことであつたとすれば、驚嘆する外ないだろう。右の挿入句のない、覚一本を始めとする他の当道系諸本の場合、重盛は我が国に深い絶望感を抱いていることになろう。ところで、重盛の意識の中には、「吾朝」とは異なる、もう一つの世界として外国、宋がある。そこは、「大王」も、「伊王山」も重盛の善意を受け入れて、その後は、日本における平家の運命に関わりなく、永遠にその受け入れた状態を保ち続ける、そうした世界として捉えられている。重盛にとって宋は、手の届く永遠なる世界なのだ。重盛の国際感覚が窺われる、もう一つの章段が前節でも取り上げた「小松殿熊野詣事」である。

清盛に宋の「勝タル名醫」の治療を受けるよう勧められた重盛は、先ず「今度ノ所勞旁存旨候」と述べる(延慶本・源平盛衰記にしかない)。源平盛衰記は次いで、「嚴重の瑞相等」があつたことを述べ、「神慮の御計凡夫の是非不及歟」と言う(四部合戦状本はこの熊野権現への祈願に触れた文で、重盛の返事は始まっている)。一方、当道系諸本では、重盛は先ず「延喜聖代」が「異國ノ相人ヲ都ノ内へ入」れたことを「末代マテモ賢王ノ御誤リ吾朝ノ恥」と記し伝えられていることを挙げる。そして、「重盛程ノ梵人者力異國ノ醫師ヲ王城ノ内へ召サン事ハ國ノ恥ニ非ヤ」と使いの越中前司盛俊に逆に問いかけている。

さて、「存旨」があつた為に、これまで治療を受けず、又、今更宋の「名醫」にも会おう気のないことを述べた重盛は、「今以肝心ト」し

中院本を除く当道系諸本によれば、清盛の遺骨は経島に納められたことになっている(他本は福原とは言うが、そのどこかは記さない)。

清盛がごく自然に外国に接していた唯一の例として、「小松殿熊野詣事」で重盛に宋医の治療を受けるよう勧めたことがある。

重盛が「悪瘡」の治療もしないでいることを聞いた清盛は、宋から「勝タル名医」が渡つて来て、上京の途中(延慶本以外にはない)、摂津国今津に着いている【四部合戦状本は筑紫の今津とする。又、当道系諸本のうち覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本は「本朝にやすらふ」(覚一本)として具体的在所を示さず、延慶本・屋代本等に近い文の中院本・八坂本も具体的在所を落としている】ことを示す。そして、この医師が「續^キ神農化他之舊跡^ヲ」「追^フ祇婆鵠之先蹤^ヲ」名医、名声ある高医であることを述べて(延慶本にしかない)、「速ニ對面シテ殊ニ醫療ヲ加ヘシメ給ヘ」と勧める。

【玉葉】をみると、この頃、九州を中心にした地域の医師法師の治療を受けることが貴族の間で流行している。これは、医官の療法では治らない病気が多く、「爲全身命」そうした医師に趨つたもののようである。安元三(一一七七)年六月十日条によれば、兼実もこの頃大善坊という、そのような医僧の灸治を受けているが、これは源中納言雅頼の勧めによつたものであった。そして、兼実は、このような僧の治療を受けたことを「最密々事」「雖非穩便」「不顧世上之毀而已」と恐れているのである。

兼実の場合は九州の医師法師であるが、清盛が勧めたのは「宋朝」の医師であった。治承年間に入ると、宗盛の北の方、大納言邦綱と平家一門及びその周辺で、腫れ物にそのような医師法師の治療を受けた例が出て来る。平家の周辺で、そのような医官以外の者の治療まで受けることが行われたということも治承以後は広く知られたことだったに違いない。延慶本によれば、清盛は「ナヘテノ醫師ナムトノ療治ス

マシキ事ト内府ハ思覧」と言つて、宋の「勝タル名醫」を勧めたことになっている。清盛の意識の中には、日本の医師では治せないような病氣も治せるような医師が宋にはいるという考えがあるのではないか。平家は、医官の治術が尽きた時、西国の医師法師の治療を受けているが、この逸話は、医師法師の医術の本家が宋であったことを暗示してはいないだろうか。

それにしても、清盛は何のためらいもなく、重盛に宋の医師の治療を受けるように勧めている。兼実でさえも「爲全身命」「密々」医師法師の治療を受けているのだから、清盛が我が子の為に良いものは何でも勧めるのも無理はない。そして、そのこだわりのない親の姿に、清盛の外国への意識が重ねられているのに違いない。

五

前節で筆者は、日宋貿易を積極的に推進した清盛の、その方面に対する姿勢や事業が「平家物語」にどう捉えられているかを見て来た。本節では、「平家物語」の中でその清盛と対照的に描かれがちな重盛の国際感覚を調べてみることにしたい。

重盛の關係する国際的問題を扱った章段が「平家物語」に二つある。次に、先ずその一つ、「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」の粗筋を述べてみる。

重盛は治承三年四月(両足院本を除く当道系諸本は「安元ノ比」とする。又、源平盛衰記は「奥州知行の時」としているが、四部合戦状本・両足院本には年代を示す表現が全くない)、「年来帰依靈像」「自筆彫寫一部十卷法花妙典」(共に延慶本以外にはない)と二千三百兩の「金」(源平盛衰記・四部合戦状本は千三百兩、当道系諸本は千五百兩とする)を「大唐」(当道系諸本は「大宋國」といった表現で

て行くことにする。

築島以前、ここは「泊ノナクテ風ト波ト立相」「怖キ渡」と言われていたらしい（このことは延慶本・長門本にしか記されていない）。このことを聞いた清盛が阿波民部成良に命じて承安三（一一七三）年に初めて島を築かせた【延慶本・長門本・源平盛衰記に同趣旨の文が見られるが、源平盛衰記は承安二年としている。又、当道系諸本のうち覚一本・平松家本・鎌倉本・小城本（百二十句本）・（両足院本）は応保元（一一六一）年二月上旬の開始とするが、特に奉行者名を記していない】。このことは【帝王編年記】にも（奉行者を記さないが）記されている。しかし、この島は次の年の風で流されてしまった（覚

一本をはじめとする前記当道系諸本は同年八月の大風とする）。【帝王編年記】も、年月は曖昧だが、「不得防固」であつたと記している。そこで、「石ノ面ニ一切経ヲ書テ」沈め、再築したので、そのことに因んで経島と呼ばれることになった（このことは延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本と全ての当道系諸本に見られる。中でも、中院本・八坂本は「一日一夜に書写し供養して築籠」たと詳しい）。「石ノ面ニ一切経ヲ書」いたのは「海龍王を可奉有」「法施」（源平盛衰記）としてということかと思われる。ところが、源平盛衰記は、この石の一切経の外に、「白馬にしろくらを置童を一人のせて人柱をそ入れける」ということを記している（「海龍王」云々はこちらについている）。一方、当道系諸本のうち覚一本・平松家本・鎌倉本・小城本・百二十句本（両足院本）は、石の一切経を沈めることになった理由を「人柱たてらるへしなと公卿僉議有しか共それは罪業なりとて」（覚一本）こうなつたとして居り、正反対の描き方となっている（猶、これらの諸本の中西足院本を除く諸本は、この築島を応保三年三月下旬、奉行を成良とする）。【帝王編年記】は「埋一人祭海神」つたとする。覚一本をはじめとする前記当道系諸本は、「人柱」を「罪業」と見て「石ノ

面ニ一切経ヲ書」かせて沈める清盛を描き出しているのだが、これは、公卿達よりも人命を重んじ、合理的だと言えるように思う。覚一本をはじめとする諸本が、このように人命を重んじる清盛を描き出した理由は仏教思想と関わりがあるかと思われるが、詳にし得ない。さて、延慶本・長門本によると、一切経を記した石は積船ごと沈められたらしいが、成良から金もかかり、人手も足りないのので「往反ノ船ニ仰テ十ノ石ヲ取持彼所ニ入ヘシ」という旨を下されたいという上申があつて、その旨の宣旨が下された。この宣旨に任せて「往反ノ船」から石が沈められ、又、「催シナケレトモ心有人ハ土ヲ運ヒ木ヲ殖ケレハサマノノ草木生ツ、」いて島らしくなつたらしい。この間の経過をもう少し具体的に記すと、最初は防波堤のようなものを一里突き出しただけであつたようだ。ところが、そこに漂流物が吹き寄せられて次第に広くなつたので、更に陸地にそこから石垣を築いて島を造つたかと読める。長崎の出島の祖先と言えようか。宣旨についてだが、治承四（一一八〇）年二月二十日の太政官符案には、「國之功力」を借りなければ「連々之營築」は不可能として、「往反」の梶取・水手達に各三日の労力奉仕が求められている。延慶本・長門本の「宣旨」や「心有人」の助力はこのようなことの周辺にあつたことではなからうか。こうして経島が築かれ、「今ニ至マテ上下往来ノ船ニ無煩」（屋代本）というのである（この表現は源平盛衰記・南都本と全ての当道系諸本にある）。

又、「大政入道慈恵僧正ノ再誕ノ事」によれば、清盛が輪田岬に「四面十余丁同シ棟ニ家ヲ作り千人ノ持経者ヲ配分シテ坊コトニ一面ニ座ニツケ炎ノ宮ノ儀式ノ如ク十万僧讀經説法丁寧ニ勤行ヲ致」したことが記されている（源平盛衰記と中院本・八坂本を除く当道系諸本に同趣旨のことを記した文がある）。和田岬での千僧供養は「玉葉」によれば、承安二年三月十九日頃に行われたようである。又、屋代本・

節に「百済」「新羅」という古名が挙げられていたような古典籍主義、古名主義によるのではないかという気もするからである。

四

前節で、筆者は宋からの舶来品が平家の栄華を飾っていたことが「平家物語」に記されていることを述べた。このことは、実は、延慶本・長門本・源平盛衰記の「大政入道経嶋突給事」の章段でも指摘される。

福原の輪田泊に経島が築かれると、見る見るうちに船宿が出来た。島が築かれて未だ十余年に過ぎないが、風景は他所に得がたいものがある。いま暫くすると、室や高砂にも劣らない名所となるに違いないと思われた。遊女も集まって、船旅の心細い人々に和歌をうたい、漢詩を朗詠して、心を慰める。「鼓ヲ鳴シ拍子ヲ打」てば、客も「笛ヲ吹絲ヲ弾」いて、ある程の財産を全てここでの遊興に投じてしまう有様であった。この経島の賑いは「唐ノ大王」の耳にまで入って、「日本輪田平親王」と呼んで、「帝王ヘタニモ獻給ヌ希代ノ寶物共」を送つて来たとかいうことである。

右の大意のうち、最後の一文を除く経島の賑いが源平盛衰記にはない。源平盛衰記は、その代わりに「上下往来の船おそれなく國家の御宝を末代のきは也」という航海の便をはかった清盛の事業を称える短い文を記している。さて、延慶本・長門本によれば、経島は築島後、急速に港町として繁栄したらしい。経島での遊興に「國司」も「商人下臈」も家財をことごとく注ぎ込んだというのだから、一大歓楽街が出現したと見てよからう。勿論、その歓楽の度合は、この地での交易の賑いを反映しているだろう。「唐ノ大王」が「希代ノ寶物共」を送つたというのは、宋からの交易船が直接、経島に入っていたことを物語つ

ているのではないか。平家と「國司」が「商人」を交じえて経島で「唐ノ大王」と貿易を行っている、これが平家の時代であった。その意味では経島こそ平家の時代を象徴する土地だったと言えるはしないだろうか。

九条関白兼実の日記『玉葉』によれば、嘉応二（一一七〇）年九月二十日、後白河法皇は「宋人來着」を見るために、清盛の「福原山庄」に趣き、兼実を「延喜以來未曾有事」「天魔所爲歟」と仰天させている。やはり、経島の築かれる福原まで宋人が来ていた。当時の国際交流の推進者が清盛であり、その交流の地が福原になっていたことが、この記事からも明白に読み取られる。又、承安二（一一七二）年九月十七、二十二日条によれば、宋の明州の判史から法皇と清盛に進物と「送文」があった。兼実は「日本國王」という表現が、過去の例からしても不適切であると考え、返却すべきであると記している。この進物は、翌年三月十三日条の「返牒」の表現によれば、「美麗珍重」の物だったとのである。兼実の批判にも拘らず、法皇も清盛も件の進物を受け取り、「答進物」「返牒」を送っている。その際も、兼実は「遺物」の体について「偏新儀歟」と驚き、法皇の「太上天皇」という署名にも不審を記している。法皇や清盛の対応は、『玉葉』でみる限り、甚だ慣例を破つたものであったようだ。兼実の関心が法皇に向いているので、すっかり陰になっているが、清盛への宛名は「日本國太政大臣」であった。「日本輪田平親王」とはなっていないが、この承安二年の時は法皇の宛名が問題になっているので、延慶本等の「日本輪田平親王」という表現は、この日記の関心の延長線上にあるという気がする。『玉葉』によれば、清盛の姿勢が法皇を動かし、法皇をも巻き込んで当時の国際交流が進められていた様が窺われる。

さて、清盛の修した「大善」の中でも、「人ノシ態トハオホヘス不思議」と評されている経島築きを、諸本がどう描いているか、次に見

百済」となっている。

四箇所のうち三箇所の表現が一致しているのは屋代本だけで、他の諸本は殆ど統一がとれていない。傾向として、「新羅百済」「天竺振旦」「鬼界高麗」という三つの取り合わせが一纏まりとなつて動いている風がある。このことは語り口調が影響しているのかも識れない。それにしてもこのように表現がまち／＼になつたのは何故であろうか。大体、「天竺」「振旦」というのは地域を指した呼称で、そこに現実にある王朝とは無縁である。又、「百済」は白雉十四（六六三）年に、「新羅」は承平五（九三五）年にそれぞれ滅亡し、「鶏旦」も治暦二（一〇六六）年に遼に国号を改めている。又、「鬼海」は、先節に記したような境界の島々の総称かと見られる。従つて、当時の国号を使つているのは「高麗」一つに過ぎない。このような用語の混乱が、「平家物語」諸本の先述のような混乱の一つの原因となつていてはないかと考える。又、本節で取り上げた四例が殆ど源氏と平氏の戦いを背景にしていることから気付いたことだが、ここには全く源氏・平氏と彼等の行くという外国の人々との関わりが考えられていない。平家について言えば、後述のように、既に重盛が宋の「大王」に「金」を送つていた。このように清盛の時代から交流のあつた宋が「振旦」という白紙の地域名で呼ばれるのも妙だ。平家は「鬼海」「高麗」「振旦」「天竺」に逃げることはあつてもこれらの国に助力は求めず、義経の方も逃げる平家を追つてこれらの国々に攻め込んでも、戦いの様相が変わると考えることなどはないようだ。いや、前述の例は全て言葉の文で、平家にしても源氏にしても外国に出て行かなかつたのだから、その言い方にこだわら過ぎては宜くなからう。しかし、日本国内のあらゆる勢力に助力を求めた平家が、外国に逃げるぞと言いつつながら、そこに助力は求めなかつたのは、日本国内の戦いという意識があつたからだと思われる。この点では、日本と外国との間にはつきりした線が

引かれていた。

三

冒頭に記したように清盛の時代は盛んに日宋貿易が行われた。従つて、日宋貿易で得られた珍らしい品々が平家の栄華を飾つた筈である。そのことを示しているのが、「八人ノ娘達之事」の次の部分であろう。

綺羅充滿シテ堂上花ノ如シ 軒騎群集シテ門前成市^ナ 揚州ノ金
荊岫ノ玉^ナ 呉郡ノ綾^ナ 蜀江ノ錦 七珍万寶一トシテ闕タル事ナシ 歌堂
舞閣ノ基 魚龍雀馬ノ翫 物帝闕モ仙洞モ争カ是ニハ過ヘキト目出ソ
見エシ

右のところは全体としても諸本間の異同が殆どないが、「揚州ノ……事ナシ」の一文についても、違いは源平闘諍録が「錦」の下に「善車善馬」を加えているということだけである。この一文は右の引用部の中で、平家を飾り立てていた品々が最も具体的に挙げられている箇所である。興味深いのは、その具体的な品々が全て中国の南宋の領域のものであることである。ここに記されている産地・産物は「平家物語全注釈 上巻」^(注四)によると、「揚州ノ金」「荊岫ノ玉」は「書経」禹貢に、「呉郡ノ綾」は「唐書」韋堅伝にその旨が記されていることである。このような中国の典籍に記されていたり、人によく知られていたりする名品を全て平家はもっていたというのである。富倉徳次郎氏はこれらを「驕奢な品」「中国の贅沢品」と呼び、同時に、これらについて「すべて単なる誇張な形容ではなく、六波羅の邸宅にあつた宋から渡来した品でもあつたに違いないのである」と述べられている。^(注五)しかし、筆者は、これらの表現を一般的に宋からの舶来品が平家の栄華を飾り立てていたことを示したものと受け取って置きたいと思う。「揚州ノ金」以下の具体的品物は「平家物語」編著者の古典趣味（前

二

筆者は前節で当時の領土について、「平家物語」の描いているところを纏めてみた。

次に、その日本から出ようとする場合、外国はどう捉えられているであろうか。「平家物語」の現在以外のものは一切省略し、具体的に国なり地域なりが挙げられているものだけで見て行くことにする。

「平家福原^七一夜宿事^{付録}」に、福原に落ち延びた平家一門・与党を集めて二位尼時子、内大臣宗盛母子が、安徳天皇をどこまでも奉じて行くよう結束を求める場合がある。この時、一同は「設日本國ノ外ナル新羅高麗ナリトモ雲ノハテ海ノハテナリトモヲクレ奉ヘカラス」と答え「長門本は「百済」を加える。一方、源平盛衰記は「天ちくしむたん」とし、南都本は「新羅百済天竺震旦」とする。又、当道系諸本のうち屋代本・平松家本・竹柏園本・小城本・百二十句本・中院本は「鬼海高麗天竺震旦」とし（両足院本は「鬼界高麗」だけ）、覚一本・鎌倉本は「新羅百済高麗荆旦」（覚一本）とするが、八坂本は全く具體的な国名を挙げない。て、結束を盟った。注記したように具體的な国名の挙げ方は諸本により相当ばらついている。

次に、「尾形三郎平家^於九國中ヲ追出事」の章段では、尾形三郎伊栄に太宰府を追い出された平家は「鬼海高麗ヘモ渡ナハヤト覚セトモ」叶わず、山鹿兵藤次秀遠の城に入っている。延慶本の表現によれば、鬼海は南下、高麗は北上ということになる。延慶本でも「平家福原^七一夜宿事」での表現と一致していないが、こども諸本によって、以下のような異同がある。先ず源平盛衰記は「新羅百済」、源平闘諍録は「震旦鬼海高麗天竺」とするが、南都本や小野文庫本は具體的な国名を記さない。一方、両足院本を除く当道系諸本は全て「新羅百済高麗

契丹」としている。両足院本は「鬼界高麗」となっている。これらのうち、「平家福原^七一夜宿事」での表現と統一がとれているのは覚一本・鎌倉本・両足院本だけである。

又、「宗盛院宣ノ請文申ス事」の章段では、新三位中将重衡と三種の神器の交換を提示された宗盛が、提案を拒否し、安徳天皇を奉じて都へ還御出来なければ、「牽^レ浪^ニ随^テ風^ニ可^シ零^チ行^{マシマス}御新羅高麗百済鶏旦^ニ終^ニ可^キ成^ル異國之財^ト歟」と言つて、焦る後白河法皇を逆に脅している。こども諸本によって異同が著しく、南都本は延慶本・長門本・南都異本の四箇国の上に「鬼海」を加えているが、四部合戦本は「高麗鬼界百済」の三箇国である。当道系諸本でも、屋代本・覚一本・竹柏園本・両足院本・八坂本は「鬼海高麗天竺震旦」だが、平松家本はこのうち「天竺」を欠き、鎌倉本・小城本・百二十句本は「新羅百済鬼海高麗荆旦天竺震旦」（鎌倉本）と網羅的である。又、東寺執行本と中院本は具體的な国名を記さない。屋代本は「平家福原^七一夜宿事」と同一表現だが、これには地域の重複がない。鎌倉本等の表現の主旨はどこへでも行くぞということなのであろうか。

右に挙げたものは、都落ちしてから後の平氏側の言葉に出てくるものだが、最後に源氏側の言葉を取り上げて、この節を終えたい。

「判官為平家追討西國ヘ下事」の章段で、院の御所へ上った源九郎大夫判官義経は、平氏追討に当たって、「鬼界高麗天竺振旦マテモ義経有命之程ハ可責」と言い切つて立つ。日本の領土の外までも追い駆けて、必ず討つて来るという意気込みを示したものである。ここでは、両足院本を除く当道系諸本は延慶本と同じ表現だが、四部合戦本を除く非当道系諸本に以下のような異同がある。先ず、南都本は延慶本などの表現の後に「新羅百済」を加えるだけであるが、源平盛衰記は「天竺振旦」に換えて「新羅百済」を置く。一方、長門本は「新羅高麗荆旦百済」という表現である。当道系諸本のうち両足院本は「新羅

「平家物語」の中の日本と外国

橋 口 晋 作

「平家物語」の時代、即ち清盛の時代から鎌倉時代の初期にかけては日宋貿易が盛んに行われた時代であった。^(注一)この経済活動を中心にして国際交流が盛んに行われるようになった時代を「平家物語」はどう捉えているのであろうか。本稿は、この国際交流の盛んになった時代に対する「平家物語」編著者の姿勢などを窺うために試みたものである。

一

「平家物語」は、当時の領土をどのように認識しているものであろうか。まず、この問題から入って行きたい。

領土に関して、「平家物語」に共通して見られるのは「王土」^(注二)の意識である。「王土」については、「重盛父教訓之事」の章段で、重盛が『詩經』「小雅」「北山」の詩から「普天ノ下莫非^{コト}王土^ニ 卒土ノ濱莫非^{コト}王臣^ニ」の表現(当道系諸本では「卒土ノ濱」の句を欠く。又、「王地」とするものも多い)を引いて、このことを強調していた(但し、源平闘諍録には「王土」「王地」という表現はない)。

「王土」は、言うまでもなく、国司の治める国に分割されている。その国の数は、「八人ノ娘達之事」の章段によれば六十六箇国とある。この「王土」と重なる空間が延慶本・源平盛衰記・源平闘諍録に出てくる。それは、「兵衛佐伊豆山ニ籠ル事」の章段で、藤九郎盛長が

「兵衛佐 足柄ノ矢倉ノ館^{本マ}ニ尻ヲ懸テ 左ノ足ニテハ外ノ濱ヲフミ 右足ニテ鬼海力嶋ヲフミ」(源平闘諍録は「東國」・「西國」と漠然とした表現である)という夢を見たところである。この夢は、懷嶋の平権守景能によって、「東ハソトノ濱 西ハ鬼海嶋マテ 伏シ奉ヘシ」と解かれている。これは、「外ノ濱」から「鬼海力嶋」までが源頼朝、鎌倉幕府の支配する領域となったことを反映しているに違いない。

「王土」六十六箇国は、征夷大將軍の支配する「外ノ濱」から「鬼海力嶋」までの地域であった筈だ。

「外ノ濱」付近を更に具体的に記したものは「平家物語」にはない。^(注三)しかし、「鬼海力嶋」付近は、延慶本・長門本・源平盛衰記の「成経康頼俊寛等油黄嶋へ被流事」に、

鬼界嶋ハ異名也 惣名ヲハ流黄嶋トソ申ケル 端五嶋奥七嶋トテ 嶋ノ数十二アムナル内 端五嶋ハ昔ヨリ日本ニ随フ嶋ナリ 奥七嶋ト申ハ未タ此土ノ人ノ渡タル事ナシ 端五嶋ノ中ニ流黄ノ出ル嶋々ヲハ油黄ノ嶋ト名付タリ

と記されている(源平盛衰記・長門本は「惣名」を「薩摩かた」とし、「鬼界嶋ハ異名也」といった表現はない)。これらによれば、九州の南西に十二の島が認められていたことになる。島の名前は、長門本に「白石 あこしき くろしま いわうか嶋 阿世納 阿世波 やくの嶋 とて めらふ おきなほ きかい嶋」と記されている(十島しかないし、「とて」という表現が入っているのも変だが)。これらの島々のうち「端五嶋」が「日本ニ随フ嶋」として認められている。但し、源平盛衰記は、「流黄嶋」を「奥七嶋」の一つとし、そこに丹波少将成経が流されたとする。しかし、その成経の許に門脇宰相教盛からの使者が通っていたというのはおかしい。